

平成8年度（1996年）

流行語……自分で自分をほめたい、友愛／排除の論理、メークドラマ、がんと闘うな

- 04/01 広酪アンテナショップオープン
- 04/22 第1回生乳受託販売委員会
- 05/03 フラワーフェスティバル参加
- 05/30 広酪CS県知事表彰
- 05/31 広酪第2回通常総会
- 07/01 全農家の細菌数検査を復活
- 08/03 ミルクフェスティバル
- 10/26 酪農・乳業親善ソフトボール大会
- 11/03 上野組合長黄綬褒章受章
- 01/21 ミスミルク知事表敬訪問
- 02/19 山陽乳業へ広酪乳業部門統合



広酪アンテナショップ「広島駅地下街」にOPEN — (店名「ディリーアイスショップ」) —

◆4月1日広島駅地下街「食彩館」に広酪東城事業所で製造する手作りアイスクリームを中心に、酪農製品を販売する店舗をオープン。年間売上目標を2千5百万円とした。



乳価交渉委員13名を選任

(第1回生乳受託販売委員会)

◆平成8年度の乳業者との乳価交渉は難航。乳価交渉に力を傾注するため、販売委員25名のうち13名の小委員を選任してメーカーとの交渉を行うことを決定。平成8年度の生乳計画生産数量枠は73,396トン（前年対比101.76%）とした。



話題……たまごっち、菓害エイズ、援助交際、ルーズソックス、アムラー、プリクラ



138万観衆に牛乳PR

フラワーフェスティバル参加

(広酪と牛乳普及協会)

- ◆ 5月3日からの3日間第20回のひろしまフラワーフェスティバル（広島市）が開催。県普協と広酪は県JAグループと協賛。NHK前のスイートピーステージでクイズや歌で演出しながら牛乳試飲コーナー、アイスクリームの販売を3日間展開。

管内四カ所で懇談会（熱心に膝詰談判）



- ◆ 総会前の支所管内の懇談会は、総会での質疑討論を補完する目的で開催。出席者は、各会場とも20名程度。



第2回通常総会 第一次中期計画策定 「3年度酪農家は50戸減少」

- ◆ 5月31日 第2回通常総会を開催。広酪中期3カ年計画が承認された。組合員433名のうち本人出席92名、書面出席293名、委任状出席48名。



広酪クーラーステーション

広島県知事表彰

- ◆広酪クーラーステーション（三次市）は営業施設と衛生管理が優秀であるとして広島県知事表彰を受賞した。



全農家の細菌数検査を復活（平成8年7月～）

- ◆平成7年7月1日PL法（製造物責任法）制定以降、乳業者の品質に対するチェック体制は一段と厳しくなった。本県や岡山県の学校給食で発生の大腸菌による集団食中毒事件は、大きな教訓となり食品業界では更なる衛生対策の徹底が図られることになった。広酪では、設立以降未実施であった細菌数検査について全酪農家を対象に月1回不定期の細菌数検査を開始。



広酪メンバーズクラブ会員消費者と交流

100名参加

- ◆消費者の皆さんに「酪農に対する認識を深めてもらおう」との願いで取り組む、消費者との交流「第13回ミルクフェスティバル」を県畜産技術センターを会場に開催。主催は、広酪メンバーズクラブ・広酪は協賛。牛乳早飲み、搾乳体験、長靴飛ばしなどの企画で、消費者との交流を楽しんだ。



上野千里組合長 黄綬褒章受賞

◆畜産、とりわけ酪農の振興については、自らの実践による卓越した理論と激動する酪農情勢を展望し、揺るぎない信念に基づいて酪農の発展に貢献した功績が認められ、11月13日黄綬褒章を受賞。広島県酪農組織の整備統合、広域生乳流通合理化などの功績が高く評価された。



ミスミルク知事を表敬訪問

1月21日12代ミスミルクの3名は、広島県庁に藤田雄山知事を訪ねて、ミスミルク就任挨拶と広島県産牛乳消費拡大に対する要請とPRを行った。

ミスミルクは1年間、各地のふるさと祭り、農業祭、健康祭りなどのイベントに参加し、牛乳製品消費拡大などPR活動にあたった。



山陽乳業(株)と広酪乳業部門統合に関する覚書に調印

2月19日山陽乳業(株)本社(三原市)にて、広酪の北部、東城の両プラント廃止し山陽乳業(株)に業務承継する覚書を確認して遊佐社長と上野組合長が調印。

広酪ブランド名の「げんき牛乳」、「げんき王国」、「フレスタ」、「ゆめ」、「酪農牛乳」の製造は山陽乳業(株)に継承されることとなった。

平成8年度を振り返って

▼3月末で広酪の北部・東城の両ミルクプラントの幕引きを行う結末にー。▼農協プラント本来の理念は生産者の搾った生乳に附加価値を付け高く販売し、生産者の手取り乳価を高くすることにあった。▼昭和48年頃から10年間は消費の伸びと、スーパーマーケットによる特売と大量販売で、農協プラントは全盛期であった。▼プラントの閉鎖は時代の流れとは言え、多くの犠牲を伴う苦渋の選択でもあった。